

保護司制度総合的研究プロジェクト（抄）

1 研究の目的

変容する地域社会における保護司（会）の活動や個々の保護司の意識等の実相、保護司制度を支えている社会文化的要因などを多様な角度から分析するとともに、誰一人取り残さない社会、安全・安心に生きられる地域社会の実現に対し保護司（会）活動が与えるインパクト及び犯罪をした人や非行のある少年の立ち直りを促しそれを支える上で保護司（会）活動が果たしている役割やその有用性などを実証的に明らかにするなど、保護司制度について総合的に研究する。その結果を踏まえ、保護司制度の伝統を未来につなげるためにどのような創意工夫が必要とされるかなど保護司制度の発展を見据えた制度改革の方向性について提言し、保護司制度の未来を構想することを目的とする。

2 研究の内容

研究1：変容する地域社会における保護司（会）の効果的な在り方

地域社会の姿と保護司制度は共鳴し合う関係にある。すなわち、地域社会の現状やどのような地域社会の未来像を描くかという地域社会の意思が保護司（会）の活動等に影響を与え、反対に、保護司（会）の活動がその地域社会の現状や未来に影響を与えるとといった、相互関係を分析し、例えば、保護司（会）の活動が、互いにケアし合う地域社会の創造にどのように寄与しているか、元犯罪者を受け入れその立ち直りを支える包摂的な社会環境を醸成することにどのように肯定的な影響を与えているか、などについて明らかにする。

また、地域福祉政策における地域共生社会・包括的支援体制にかかる施策の進展を踏まえ、それぞれ固有の土壌を有する地域社会にあって、人と人のつながりを強め地域の力を高めるために、また、保護観察対象者らの多様で複雑な「生きづらさ」に制度の狭間を越えて伴走するうえで、保護司（会）の活動としての効果的かつ固有のアプローチについて検討する。

研究2：保護司による処遇の分析と有用性

保護司による保護観察対象者に対する関わりの在り方にどのような変化がみられるか明らかにするとともに、近年その現状の姿がデシスタンス論等の観点から評価が高まっている中で、保護観察官との協働態勢の下で保護司（会）活動が保護観察対象者の改善更生を促す上での有効性について検証する。

また、その有効性を支える、保護司（会）による保護観察対象者との関わりの本質について分析し、保護司（会）に今後新たに期待される役割や活動の内容、ICT技術の処遇への活用が与える影響とその活用拡大の可能性等について検討する。

研究3：保護司の確保・育成と保護司会に期待される役割

保護司制度の歴史的発展過程や保護司の意識・価値観や活動の変化等を踏まえて、保護司のナラティブの分析等を基に、保護司制度を支えている文化的な背景、保護司としての長年の経験を経て真の保護司になっていくと言われるプロセスとそれを支えるモチベーションの要因、そこで目指される保護司像について明らかにする。

また、これらを参照しつつ、保護司の確保や育成の在り方、保護司がボランティアであることの意義と活性化の方策、保護司会の在り方や期待される役割などについて検討する。

研究4：社会内処遇へのボランティアの参画に関する国際比較

犯罪者処遇における市民参加の国際的な現状を整理し、特にボランティア性の高い活動の位置づけ、役割、有用性等について国際比較を行う。また、国際更生保護関係団体や専門家等が実施する国際的調査研究プロジェクト等と連携し、国際的な横断的調査を進める。

これらにより、国際的な観点から日本の保護司制度の意義を捉え直し、その普遍的価値や有用性、国際的にアピールするポイント、導入を検討する諸外国での展開上の留意点などについて明らかにする。

3 研究期間

令和4年7月から令和7年3月まで